

# ファッションの変遷から見るジェンダー意識

## －戦後の社会を中心に－

三尾 健太

今日の社会では、ジェンダーに関する女性たちの問題意識は高くなりつつある。女性が従来の「女らしさ」からの解放を目指す一方で、男性は未だ従来の「男らしさ」に囚われている。本論では性差の規範とファッションの関わりについて研究した。

先行研究ではまず衣服の機能について研究し、着衣は身体が「女らしさ」「男らしさ」とジェンダー化される最も効果的な方法だとわかった。また、男女で求められる理想像が異なる理由は、近代教育が影響を与えていたことを理解した。

そこで、「ジェンダーレス男子」と表現されるような性差の規範に囚われない人がいる現代において、若者が自身の服装を選ぶ時に性差を意識しているのか知るために、アンケートとインタビュー調査を実施した。結果として、現代の若者は従来の「男らしさ」「女らしさ」に囚われて服を選択していることが明らかになった。ファッションにおいて、色は従来の「男らしさ」「女らしさ」に当てはまる印象を与えていることもわかった。

まず、服装において、色はその衣服の着用者に対する認知に影響する。それはインタビュー結果の「青を着たことで、男性的な自己認知が高まった」ことからわかる。つまり、ファッションにおいて色の役割は、自身や他者に「男性的」「女性的」な印象を与えていた。色においても「男性は青」、「女性はピンク」という従来の性規範がある。なぜこの固定化された性規範があり続けるのだろうか。従来の性規範に囚われない「フェミ男」や「ジェンダーレス男子」のような人たちが誕生したにもかかわらず、なぜ未だに若者の中に従来の性規範が残っているのか考察した。

日本の性役割に関する政策を見ていくと、女性の社会進出を支える政策に取り組んでいた。しかし、現代の若者の親世代は「男は仕事、妻は家庭」という男性社会の価値観が色濃く残っていた。このような性役割観は現代の若者にもあり、結婚などの個人的な側面においては旧来の固定化された価値観が浸透していた。

この背景には、ファッション雑誌の動向が大きく関係していると考えられる。雑誌はその時代にあった「男らしさ」「女らしさ」を表現する。ファッションと性役割観が結びついた表現をすることで互いに影響しあっている。現代の若者も性差を強調した服を着ており、従来の固定化された性規範に縛られた日本社会の現状を示している。